

赤十字NEWS 4

Japanese Red Cross Society NEWS

APRIL.2024.#1007



特集 | ▶ P.2

心理的ストレスを抱える被災者を救うために

能登半島地震「こころのケア」

TOPICS

5月は赤十字運動月間
「苦しんでいる人を救いたい」
あなたと想いをひとつにして。

企画展「救い護る人」開催
日赤救護員の使命と歴史

..... P.4-5

連載

未来を守る防災ゼミナール P.4

献血ハートフルストーリー P.5

AREA NEWS

[山形] おいしいクッキーで献血応援
バレンタインキャンペーン

[福井] 災害時は「必ず、支え合う」
隣接する赤十字奉仕団が協定を締結

[京都] 赤十字看護専門学校生が参加する合唱団
美しい歌声で能登半島地震支援

/他 P.6

WORLD NEWS

「一刻も早く暴力から解放を」
イスラエル・ガザ人道危機

..... P.8

PRESENT!!!

日穀製粉
「おいしいすいとん&
パスタ詰め合わせ」

プレゼント!
5名様

詳しくは
P.7をCheck! ▶



SPECIAL FEATURE

心理的ストレスを抱える被災者を救うために

特集

能登半島地震「こころのケア」

日赤が行う災害救護の柱の一つでもある「こころのケア」。元日に発生して甚大な被害をもたらした能登半島地震の被災地でも、多くの人々が震災によるショックや長引く避難生活によって心理的ストレスを抱えています。今回は、被災地で実施した「こころのケア」にスポットを当て、その活動内容と被災地の現状をお届けします。

なぜ、被災地では「こころのケア」が必要とされるのか？



人は災害に遭うと身体が傷つくだけでなく、心も傷つきます。そして傷ついた心が回復できず、精神的な病気を発症することがあります。苦痛や苦悩を軽減し、病気を予防する活動が「こころのケア」です。時間経過とともに被災者の心理的变化として、発災直後は、経験している出来事に圧倒され茫然自失の状態となりますが、その後は被災地の人々が活動的になり結束力が高まるハネムーン期が訪れます。しかし、時間がたつにつれて避難生活による疲労の蓄積に加え、支援者の減少や被災者の間にも状況に違いが出てきます。この時期は幻滅期と呼ばれています。移り変わる状況に合わせた心理社会的サポートが必要とされています。

INTERVIEW

能登の被災地でこころのケア活動を行った公認心理師のレポート 「大切なのは、変化に応じて、苦しみを和らげるアクション」



「こころのケア」は私たちがのような心理ケアの専門家が1回実践したらもう安心、というものではありません。実は、被災者の状況の変化に合わせたフォローが大切なのです。石川県の志賀町での活動は、発災から1カ月未満の時期でしたが、上下水道が復旧しておらず、住民の生活は混乱の中にありました。一方で日頃から地域の結びつきが強く、避難所では皆が集まって相撲を観戦するなど、一時的にでも気を紛らわせることができていました。しかし、ここから時間が経過すると人々の心理状況も変化します。被災状況が明らかになり、今後の生活再建の見通しが立たないと、希望を失い気持ちが落ち込みやすくなります。また、日頃から結束の強い関係性であったとしても、集会所や公民館などの間仕切りもなくプライバシー

が保てない避難生活を続けていると、疲労やストレスは蓄積していきます。状況の変化とともに精神的苦痛の内容も変わる…その変化に応じた継続的な支援が重要なのです。

志賀町の「こころのケア」は、地元の保健師さんや被災地域で生活を続けられている方々からお話を伺いました。通院できないことへの不安や、持病の薬が入手できずに強い不安を抱えた方には医療支援チームへつなぎ、大切な飼い猫たちを車の中に閉じ込めて世話していることに苦悩していた方には、被災地で活動する動物保護団体につなぎました。その方の心の負担を軽くするために、必要な支援に「つなぐ」というアクションも、こころのケア活動のポイントです。

佐々木暁子さん
石巻赤十字病院
公認心理師



PROFILE | ささき あきこ ● 宮城県にある同院にて患者の心理的サポート、職員のメンタルヘルスに関する業務に携わる。能登半島地震では、1月24日から28日にかけて石巻赤十字病院のこころのケア班として被災地で活動した。

SPECIAL FEATURE

能登の被災地で展開した日赤のこころのケア活動



日赤のこころのケア活動は発災当初から医療救護班に帯同する形でこころのケア要員を派遣し医療救護活動に併せて実施してきました。その後、発災2週間後を目安として専門チームであるこころのケア班の活動を開始するための調整が始まり、被災地の行政や、DPAT(災害派遣精神医療チーム)をはじめ災害時の精神保健・心理社会的支援を行う機関と連携を図りました(写真①)。災害によって経験した精神的な苦痛や苦悩

を軽減することにより、精神的な病気を予防し、ストレスからの回復力を高めるのがこころのケア活動の目的です。日赤のこころのケア班は、被災地を巡回しながらニーズを探り(写真②・③)、精神的な医療が必要なケースには専門医につなぐなど、あらゆる組織や団体と連携して活動を継続。七尾市・志賀町・輪島市・珠洲市・能登町で活動を展開したこころのケア班は延べ29班となりました(3月19日時点)。

こころのケア班 活動日時

- ▶ 1月14日 金沢市、七尾市でこころのケア調整班、活動開始
- ▶ 1月24日 七尾市、志賀町でこころのケア活動開始
- ▶ 2月18日 輪島市で同活動開始
- ▶ 3月 4日 珠洲市で同活動開始
- ▶ 3月 6日 能登町で同活動開始

※この他に、救護班に帯同しているこころのケア要員が医療救護活動に併せて実施



REPORT

被災行政の職員に対する「こころのケア」 ▶▶ 支援者支援

被災者を支援する行政職員は、発災直後から過重労働に陥りやすく、クレーム対応などさまざまなストレスにさらされます。中には自身も被災している立場ながらその苦悩を表に出さずに被災者のために働き続ける方もいて、過労・精神疲労から

身体の疾患を発症させたり、燃え尽き症候群に陥る場合があります。日赤の「こころのケア」は、そういった支援者の負担を軽減する活動にも重きを置いています。能登半島地震の支援活動では、行政職員が業務の合間に心身の休息をとれるように、

市役所・町役場の中にリフレッシュルームを設け、希望者にはハンドケアや足湯などのリラクゼーション、傾聴などを行いました。

リフレッシュルーム利用者の声

皆さん、足湯やホットアイマスクを使用して休息をとり、癒やされた様子で…

Voice 01

「楽になりました。暖房の効かない場所で作業して冷えていたので、足湯で温まりました。本当に助かります。もう一踏ん張りできそうです」

Voice 02

「自分で手浴や足浴しても温まらないのやしてもらって温まりますね。いい香り、この空間に来ると安らぎます…ありがとうございます。すっかり。午後からもがんばれます」

Voice 03

「リフレッシュルームから戻った職員がニコニコしていましたよ。私もう体が軽くなりました。普段はあまり言えないような話も聞いてもらえて…なんだか安心しました(涙ぐみながら)」



首・肩を温めながら蒸気で目を温めるアイマスクを着け、足湯をしながらハンドケアを受ける行政職員



疲労でこわばった全身をほぐされながら、普段は口にできない思いを話されたり。そのまま数分ウトウトしてもらった



職員の方が利用する通路にリフレッシュルームの案内を掲示

T P I C S

1 TOPICS

5月は赤十字運動月間

「苦しんでいる人を救いたい」 あなたと想いをひとつにして。

日本赤十字社では、毎年5月を「赤十字運動月間」として、赤十字の理念への理解を深める啓発を行い、赤十字活動への参加と支援を呼びかけています。5月は、1日が日赤の前身である「博愛社」の創設日、8日は「世界赤十字デー」というゆかりの深い月でもあります。

救護団体として誕生した日赤は、災害時の救護活動、平時からの備えとして防災や減災に関する取り組み、災害後の復興支援など、助けを必要としている人々のための活動を続けています。今年の運動月間では、活動をより多くの方々に知っていただくため、2023年からアンバサダーを

務める上白石萌音さんと共に、TVコマーシャルや特設サイト、SNSを通じたキャンペーンを展開します。

今年の赤十字運動月間ポスターは、地球上の全ての場所が繋がっている「空」の下、上白石さん、日赤の職員、そして赤十字ボランティアが肩を並べています。このポスターには、赤十字の「人間のいのちと健康、尊厳を守る」ための活動は多岐にわたり、赤十字活動は多くの力が結集して成り立ち、365日動き続けている、というメッセージを込めています。ぜひこの機会に、赤十字活動へのご参加、ご支援をよろしくお願いいたします。

■赤十字運動月間ポスター



アンバサダー・上白石萌音さんと共に、日赤職員やボランティアが登場するポスター。さまざまな事業の職員やボランティアの存在が、日赤の総合力を支えています

特設サイト内「赤十字運動月間」ページは4月24日公開予定。
日赤WEBサイトからご覧いただけます。



vol.1

未来を守る



防災ゼミナール

……今回のテーマ……

厳冬期や猛暑の夏…過酷な環境下で 避難生活を乗り越えるには

今月の研究部門
災害救援技術部門

お話を
伺った人
根本 昌宏さん
日本赤十字北海道看護大学
看護薬理学領域 教授

私は大学で薬理学などの指導をする一方で、寒冷地の災害対応に関する研究を行っています。オホーツク海に面した北見市にある本学で、最低気温がマイナス10度を下回る寒冷期に「厳冬期災害演習」を自治体の防災担当者・災害医療関係者のみで14年前から実施し、冬の避難環境に関する検証を行っています。今年1月の能登半島地震は、電気・水道が整備された日本の積雪寒冷地で、初めて厳冬期に起きた災害のため、発災直後から低体温症の懸念が報道されていました。この機会に皆さんに考えていただきたいのは、ご自身の環境や事情を具体的に想定した備えができていますか、ということ。能登の最低気温と1月の東京、名古屋の最低気温は実はほとんど同じです。真冬の避難生活で、乳幼児のいる家庭、高齢者のいる家庭では必要なもの、なくては困るものが変わってきます。また、昨夏のような酷暑が続く状況で

あれば、別の備えが必要になります。一般の防災マニュアルは、個々の状況に完全に対応していません。また、多くの方に「厳冬期や真夏に大きな災害は起きない」という思い込みがありますが、極寒の屋外に避難することや酷暑で冷房が使えない環境で生活する場合なども想像してみてください。備えは、変わってくるはずですよ。

避難生活の備えで、季節関係なく重要なものは「トイレ」です。水道が使えないと、避難所のトイレも普段と同じようには使えません。仮設トイレが設置されても移動距離が長く、夜になれば真っ暗で不便となり、多くの方が使う中で衛生的に厳しくなる…。災害時に快適なトイレを展開することは難しいことです。トイレを控えることを起因として災害関連疾患(エコノミークラス症候群など)が誘発され

日赤の災害救護研究所の専門家視点から、災害時に必要な知識や今から始められる防災など、役立つ情報を発信します。

災害救護研究所とは?

日本赤十字看護大学付属の研究機関として2021年に発足。災害時の救護活動を通過して得た知見を学術的に分析・集約し、被災者の苦痛の予防・軽減を目的とした研究所。

ることも認識しておいてください。ご自分で、携帯トイレの用意をしておくことは基本の備えとして重要ですよ。

最後に。今回入らせていただいた能登の避難所では、地域の関係性があるからこそ協力し合って暮らす姿が見られました。人のつながりが、いざというときの共助力になる。近所つきあいが希薄になったと言われて久しいですが、私は、コロナ禍を経て町内や隣近所の集まりが減ったことを懸念しています。面倒と感じても人づき合いを大切にすることも、重要な備えの1つです。



最悪の場合も想定しておく

2

TOPICS

企画展「^{まも}救い護る人」開催 日赤救護員の使命と歴史

4月2日から9月26日まで日本赤十字社 本社の赤十字情報プラザで、企画展「^{まも}救い護る人 日赤救護員養成のあゆみ」が開催されます。「苦しんでいる人を救いたいという思いを結集

■赤十字情報プラザ企画展チラシ

赤十字情報プラザ企画展

救い護る人

いかなる状況下でも傷ついた人を救い、健康と尊厳を守るために

開催期間 2024(令和6)年4月2日～2024(令和6)年9月26日

開館日 事前予約制 火・水・木 10:00～16:30 (12:30～13:30 閉室)

赤十字情報プラザ

TEL 03-3437-7580

し、いかなる状況下でも、人間のいのちと健康、尊厳を守る」という日赤の使命を実行する救護員。その養成の歴史をひもといていく企画です。

1877(明治10)年の西南戦争時に日赤の前身「博愛社」が誕生してから9年後、日赤は不足する救護員を確保するため、その養成を目的として最初の病院を設立しました。その理念と実践は、現代の赤十字病院や看護師養成事業に受け継がれています。2024年3月現在、全国91の赤十字病院などに所属する5231人の救護員が、災害時には班を組んで被災地に駆けつけ、長期にわたる医療救護活動を行います。その活動を支えるのは、全国約6万7千人の日赤職員の存在です。

企画展では、日赤の救護員養成の始まりから、さまざまな戦争や大災害時に奮闘しつつも救護員確保に苦悩し、養成の仕組みを時代にあわせて刷新していった日赤の歩みをたどります。



養成中の「看護婦生徒」も活躍(1891年濃尾地震)



救護訓練でdERU(仮設診療所)の設営と運営を学ぶ

開催情報

会場 赤十字情報プラザ
(東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社 本社1階)

TEL 03-3437-7580

会期 2024年4月2日～9月26日

開館時間

事前予約制/
火・水・木 10:00～16:30
(12:30～13:30 閉室)

企画展「救い護る人」

WEB
サイトは
こちらから▶



献血ハートフルストーリー vol.4

このコーナーでは、血液事業に携わる日赤職員、ボランティアさん、献血協力者などの人たちが、日々どのような思いで血液事業に取り組んでいるのかを紹介していきます。

ドナーの視点に立ち心を通わす情報発信

今月のひと

profile

関東甲信越ブロック
血液センター
所長
むろい かずお
室井 一男さん

私は、血液センター所長として安全な血液製剤を造るための検査や製造過程を管理する業務を統括しています。日赤に入職する前は、病床数が1000以上ある病院の血液科で医師として移植に携わっていました。移植医療は、ドナーがいて成り立つものであり、患者はもちろん、「ドナー視点」に立った啓発が重要。現在の献

血の課題にも、それは当てはまります。例えば、若年層(10代～30代)の献血者の減少と高校献血の地域差。高校生から献血を始めた方は20代、30代になっても繰り返し協力して下さる傾向があると分かっていますが、若年層獲得に有効な高校献血が行われていない地域があるのです。これは、教職員の方が持たれている高校生の健康不安が背景にあり、教職員・高校生本人という「ドナー視点」で不安を取り除き、高校生が献血によって自分の健康状態を知る機会にもなることを発信していきたいと考えています。

また、患者とドナーの心のつながりを生む取り組みにも力を入れています。日赤は全国に6つある公的臍帯血バンクのうち、4バンクを運営し、その一つが私たち関東甲信越ブロック血液センター内にありますが、2021年4月から全国で初

めて、臍帯血バンクの「患者さんからのお手紙」取り次ぎ事業を始めました。匿名の手紙のやり取りを通して、救われた側、救った側それぞれに温かい気持ちが育まれます。センターで働く職員も同じ思いを持っていて、それが形になったのが、職員の応募から生まれたキャラクター「つむぎちゃん」です。「関東甲信越さい帯血バンク」の情報発信には、職員が描いたつむぎちゃんが登場し、移植を支える人の温もりを伝えます。これらの一つ一つの取り組みが、献血や移植医療に対する人々の気持ちを後押ししていくことを願っています。

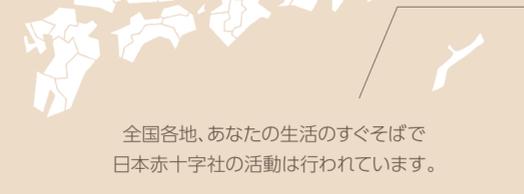


© 関東甲信越さい帯血バンク

関東甲信越さい帯血バンクのキャラクター「つむぎちゃん」

Area News

エリアニュース



全国各地、あなたの生活のすぐそばで日本赤十字社の活動は行われています。



おいしいクッキーで献血応援 バレンタインキャンペーン



山形県赤十字血液センター・献血ルーム SAKURAMBOでは、2月1日～14日にバレンタインキャンペーンを実施しました。期間中は、山形調理師専門学校と連携し、「けんけつ応援クッキー」を献血協力者にプレゼント。レーズンとドライフルーツ、カシューナッツとチョコチップなど、鉄分豊富な素材を取り入れたクッキーは、2枚入りで800袋が用意されました。製品表示シールまですべて学生たちの手作り、手作業で作られ、20枚だけハート形の「ラッキークッキー」を忍ばせるなど、工夫が詰まったクッキーは大好評。学生たちは、「自分が学んでいることを献血のPRに生かせてうれしい」と笑顔を見せ、中には、期間中に自ら初献血に訪れる生徒もいたり、温かな交流も生まれました。



災害時は「必ず、支え合う」隣接する赤十字奉仕団が協定を締結



福井県大野市と勝山市の両赤十字奉仕団は、2月7日に「赤十字奉仕団相互応援協定」を締結しました。これは、隣り合った奉仕団同士の連携を強化し、災害時の協力を円滑に行うための取り組みです。この締結によって、いずれかの市が被災した場合、被災した奉仕団はもう一方に、奉仕団員の派遣や、救援活動に必要な物資の提供などの応援を要請することが可能に。また、平時においては、合同の研修や講習会の開催や、双方主催の防災訓練への参加など、それぞれの持つ技術やノウハウを共有し、交流を図ることも、協定に盛り込まれています。全国でも先進的な事例であるこの取り組みは、奉仕団間の連携強化の第一歩。今後、両奉仕団の機動力の発揮が期待されます。



赤十字看護専門学校生が参加する合唱団 美しい歌声で能登半島地震支援

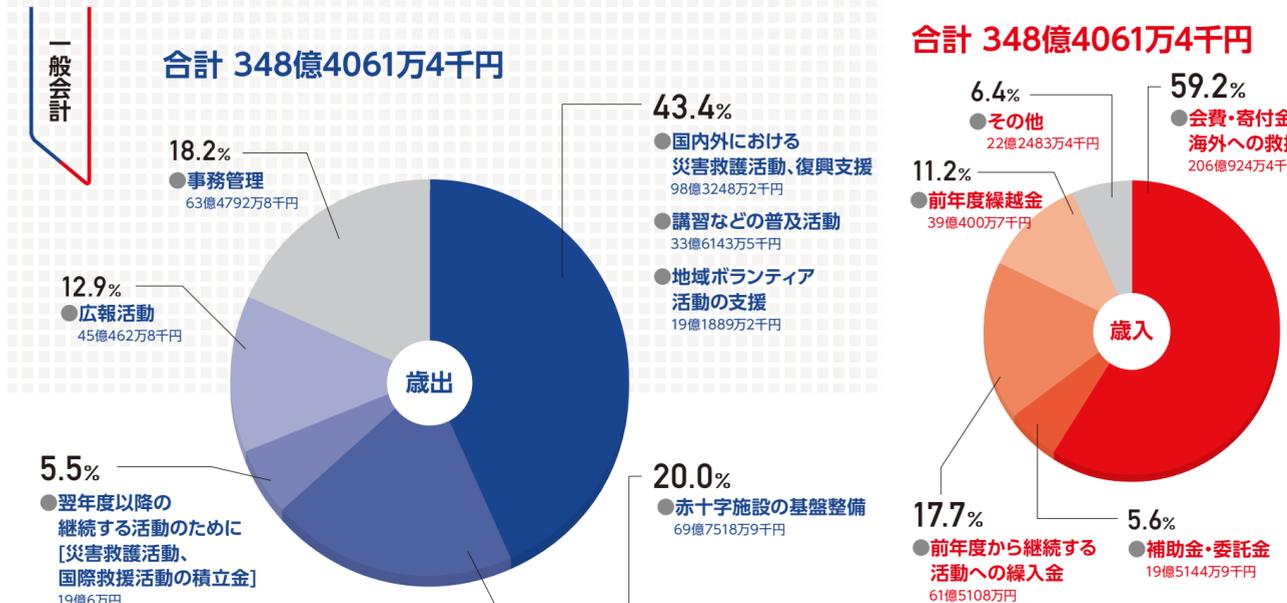


全国各地で「令和6年能登半島地震義援金」の募金活動が行われています。2月18日、京都の合唱団 Youthは新京極「ろっくんプラザ」にてチャリティーコンサートを開催し、募金への協力を呼びかけました。合唱団Youthは、東日本大震災をきっかけに、京都市少年合唱団修生有志が集まって結成され、2019年にはコンクールの賞金を東北に届けるための演奏旅行をした経験も。代表の内田さんは、京都第二赤十字看護専門学校の1年生。内田さんは、「能登の大変な状況を知り、自分たちに何かできることはないかと考え、街頭コンサートを計画しました。想像以上に多くの方が足を止めて私たちの歌を聴き、募金に協力してくれたことがうれしかったです」と語りました。合唱団メンバー15人が街行く人々、そして被災地に向けて贈った美しい歌声は、右の二次元コードから視聴できます。



令和6年度 予算概要

日本赤十字社は災害救護活動や国際救援活動をはじめとして、さまざまな事業を展開しています。それぞれの事業によって財源は異なり、全国の個人・法人の会費および寄付金などを主な財源とする「一般会計」と、各事業での収益を財源とする「特別会計」があります。



注) 1. 本社・支部間で重複計上されている20億1895万9千円は、歳入・歳出から差し引いて表示しています
2. 上記%の数字につきましては、端数の四捨五入による表示となっているため、合計が100%になりません

予算書の詳細は、日本赤十字社WEBサイトをご確認ください



PRESENT!!

食を通じて地域に貢献し、未来をつくる

長野県を拠点に、そば粉や小麦粉、米粉を使った製品を製造、販売、飲食事業を展開する日穀製粉。地域の発展に寄与したいという思いから、さまざまな社会貢献活動を実施しています。自社工場を開放して行う「新そば祭り」の売り上げの一部を松本市の「交通及び災害遺児等基金」へ寄付し、親を亡くした子どもたちを支援。夏休みで給食がなくなる時期には子ども食堂やフードバンクに食材を提供。また、2011年の東日本大震災以降、東北地方の人気商品「おいしいすいとん」の売り上げの一部を災害支援金とする寄付も開始。広く災害支援に役立ててほしいと、日赤の活動資金への寄付として継続され、今年で12年目を迎えています。この他にも、そばの生産を推進することにより荒廃農地を削減するなど、食を通じて地域社会へ貢献することを目指しています。

パートナー企業 日穀製粉株式会社

5名様

おいしいすいとん&パスタ詰め合わせ

プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・WEBでご応募ください。

①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS4月号を手にした場所(例/献血ルーム) ⑥4月号読者アンケートの回答

※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせにのみ利用いたします

⑦4月号読者アンケート質問項目

[A] 日赤の「会員」ですか
ア. 会員(年間2千円以上の寄付を継続している。但し、義援金を除く) イ. 会員ではない

[B] 赤十字について知っている活動はどれですか※下記選択からA〜Kの文字をご記載ください。複数選択可
ア. 国内災害救護 イ. 国際活動 ウ. 赤十字病院 エ. 看護師等の教育 オ. 献血(血液事業) カ. 救急法等の講習 キ. 青少年赤十字 ク. 赤十字ボランティア ケ. 社会福祉

[C] 今月号の赤十字NEWSをお読みになって、以前よりも赤十字活動全体についての理解が深まりましたか
ア. とても理解が深まった イ. ある程度理解が深まった ウ. すこし理解が深まった エ. 以前と変わらない

[D] 興味・関心を持った記事・企画はどれですか
ア. 特集 イ. TOPICS ウ. 防災ゼミナール
エ. 献血ハートフルストーリー オ. エリアニュース カ. 予算概要
キ. プレゼント ク. ワールドニュース

[E] 赤十字NEWSの適切な大きさは
ア. 今のまま イ. A4サイズ ウ. 小冊子(A5 148×210mm) サイズ

[F] 赤十字NEWSの発行回数は何回がよいですか
ア. 月に1回 イ. 2か月に1回 ウ. 3か月に1回 エ. 半年に1回

[G] 赤十字NEWSの記事をスマートフォンやパソコン(オンライン)で読みたいですか、いまままでおり紙で読みたいですか
ア. オンライン イ. どちらかというオンライン
ウ. (オンラインと紙の)両方 エ. 紙 オ. どちらかという紙

[H] その他、赤十字NEWSに関するご意見、ご要望(任意)

郵送/〒105-8521東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS
4月号プレゼント係
WEB応募/下の二次元コードからご応募ください。

4月30日(火) 必着

※当選者の発表はプレゼントの発送をもってさせていただきます



ご応募はこちら

常任理事会開催報告

令和6年2月29日、令和5年度第10回の常任理事会が開催されました。その結果は下記のとおりです。

記

1 理事会及び第103回代議員会に付議する事項について(役員を選出、令和6年度事業計画、令和6年度収支予算)

審議の結果、上記については原案のとおり理事会及び第103回代議員会に付議することが了承されました。

また、令和6年能登半島地震にかかる日本赤十字社の対応等について報告しました。

令和6年3月14日、令和5年度第11回の常任理事会が開催されました。

今回の常任理事会では、赤十字奉仕団等ボランティアの強化にかかる基本方針の策定に向けて審議し、令和6年度広報戦略について報告しました。

理事会開催報告

令和6年3月15日、全国社会福祉協議会会議室(新霞が関ビル)において令和5年度第3回目の理事会が開催されました。審議結果は下記のとおりです。

記

1 第103回代議員会に付議する事項について(役員を選出、令和6年度事業計画、令和6年度収支予算)

審議の結果、上記については原案のとおり第103回代議員会に付議することが了承されました。

また、常任理事会の理事の互選が行われ、諸星衛、寺坂禮治、木明昭一郎、最上重夫、勝山正昭、中谷博昭、末長範彦、中富一榮の名氏が選出されました。

また、令和6年能登半島地震にかかる日本赤十字社の活動等について報告しました。

代議員会審議結果公告

令和6年3月15日、本社協・瀬尾ホール(新霞が関ビル)において開催した第103回代議員会における審議結果は下記のとおりです。

令和6年4月1日
日本赤十字社

記

第1号議案 役員を選出について
理事14名が次のとおり選出されました。

理事	諸星衛	寺坂禮治	工藤祐三	伊東昭代
	町田錦一郎	利根忠博	竹内希六	坂口康一
	谷野光司郎	末長範彦	松村誠	中富一榮
	馬郡謙一	愛甲三郎		

第2号議案 令和6年度事業計画について
原案のとおり議決されました。

第3号議案 令和6年度収支予算について
原案のとおり議決されました。



ガザ地区ってどんなところ？

テロ行為防止を名目に、イスラエル側から分離壁で隔てられている。都内23区の6割ほどの広さに200万人以上が暮らしている。ガザを拠点とする武装勢力・ハマスとイスラエルの対立により、主要インフラが機能していないため、深刻な人道危機を招いている。

「一刻も早く暴力から解放を」イスラエル・ガザ人道危機

武力衝突が続くガザとイスラエル。国際赤十字はガザ地区に支援を届けるため交渉を行っていますが、戦闘が激しさを増す中、物資の搬入はままならず、深刻な食料・生活物資の不足により住民の状況は悪化の一途を辿っています。赤十字国際委員会(ICRC)駐日代表部の眞壁仁美さんに、現地の状況と、赤十字が懸命に続けている活動について聞きました。

人道上的大惨事…人質もガザの人々も凄惨な暴力から守られるべき



凄惨な状態が続くガザでは、新たな支援どころかこれまで行っていた支援を継続することすら難しくなっています。国際赤十字の支援物資や医療資機材も、ガザ周辺まで運ばれたまま待機している状態で、人も物もガザに入ること自体が困難です。加えて、ガザ内で機能している病院は限られているため、当局と医療活動の拡大・強化について前向きに話していますが、安全上の理由からなかなか実施に至らない状況です。

また、南部のラファのキャンプは、避難してきた大量の人々であふれ、道路の路肩や中央分離帯にシートを張って暮らす家族の姿もあるほどです。住民は不自由な生活を余儀なくされているだけでなく、排泄物や生活排水を処理する施設が機能していないため衛生環境が劣悪で胃腸病や皮膚病などが蔓延しています。ICRC総裁ミアナ・スポリアリッチは、さらに多くの人々の命が失われてしまうという危機感から、3月9日に緊急声明を出しました。

そこではジュネーブ諸条約を踏まえて以下の3つの点を強く呼びかけています。

- ・助けを必要としている人々に十分な支援が届くよう、敵対行為を停止すること。
- ・ハマスに拘束されている人質が無条件で解放され、人質の尊厳と安全、医療ニーズを考慮すること。ICRCは改めて、人質との面会の許可を要請します。

・イスラエル当局に拘束されているパレスチナ人が人道的に扱われ、家族との通信が許されること。ICRCは、パレスチナ人被拘束者についても状況を把握し、面会を許可されなければなりません。

(ICRC駐日代表部のHPより引用)

中立な立場で多くの人を救うために当事者との粘り強い対話を続ける



武力紛争下における保護対象を定めたジュネーブ諸条約では、傷病者の命と尊厳に寄り添う赤十字への攻撃も禁じられていて、この国際的な約束が守られることを前提として、赤十字は紛争地で支援活動を続けられています。また、赤十字マークを着けて人道支援のための物資を運ぶ要員も、同じく守られるべき存在です。そのため、紛争当事者との間で安全の確約が取れなければ、現地での救援活動も中止や延期をせざるを得ず、助けを必要とする人たちに辿り着くこともできません。パレスチナ赤新月社はガザで救命活動を行っていますが、その活動が本当に中立で公平なものなのか、当事者から疑いの目を向けられ、スタッフの身にも危険が及びました。こうした状況の中、**ICRCは、紛争当事者との対話を続け、また、ガザの人々の窮地を救うことだけでなく、イスラエルから連れ去られた人質に面会し、健康状態の確認だけでもさせてほしいと、粘り強く交渉を続けています。**これらの対話は、武力衝突が起きた昨年10月から続いていて、人質が一部解放された際の

オペレーションへとつながりました。

一方で、以前からガザで医療支援を行っているICRCは、ガザ南部で機能しているヨーロッパ人ガザ病院で手術や治療を続けていて、パレスチナ赤新月社と共に、傷ついた人々を救う活動を続けています。支援物資が思うように入っていない状況でも、ICRCの外科チームは常に誰かの手術を行っている状態で、パレスチナ赤新月社のメンバーは空爆や戦闘に巻き込まれた人々を病院へ搬送し続けています。この危険な状態でも活動を続けているのは、**紛争において「赤十字は攻撃対象ではない」という前提があるから**です。

日々、現地の悲惨な状況が報じられる中で、「なぜ、赤十字は武力攻撃を非難しないのか」と指摘されることもあります。もちろん武力紛争によって民間人の命が危険にさらされることはあってはならないことです。しかし、**赤十字は、紛争を止める団体ではなく、政治的解決がされるまでの間に「紛争の犠牲となっている人々を救うこと」を使命とした団体**です。そして赤十字は、ガザやイスラエル以外の地域、世界のあらゆる場所で人々を救う活動をしています。そのため、もし一時的にでも政治的に干渉してしまうと、理念の一つである中立・公平性への信頼性が失われ、世界で展開しているあらゆる活動が成り立たなくなります。

ICRCは、赤十字の理念の体現者として、紛争当事者と対話を続けながら、民間人に危害を加えないよう、助けを求める人々にきちんと支援が届くよう今後も粘り強く働きかけていきます。



眞壁 仁美
(まかべ・ひとみ)

赤十字国際委員会 駐日代表部
広報統括官

報道記者やディレクターを経て、2009年、赤十字国際委員会の駐日事務所開設とともに広報担当官に就任。南スーダンなどにも派遣され、フィールド要員として生計の自立支援や離散家族の連絡回復・再会事業などにも携わる。



避難民のキャンプでは生活ごみの処理もできず衛生環境が悪化。ガザとイスラエルにおけるICRCの活動は二次元コードから



ヨーロッパ人ガザ病院で休みなく外科手術を行うICRCの医師と看護師



赤十字国際委員会 総裁
ミアナ・スポリアリッチ